

伝承遊びの実施状況と課題 - 園種・設置形態による比較 -

The Comparative Study on the Play of the Tradition between a Kindergarten and the Nursery School

穂丸 武臣

Akimaru Takeomi

要約：日本の幼稚園、保育園において行われている伝承遊びの実施状況と、それに対する保育者の意識調査を行い、651園から回答を得た。伝承遊び実施率や保育者が考えている課題などについて、国公立幼稚園、私立幼稚園、公立保育園、私立保育園別に比較検討した。伝承遊びは全国の99%の園で実施されていた。伝承遊びを保育で実施する目的として、子どもの成長・発達に有用であること、日本の文化の継承に有効であることがあげられた。園種・設置形態による差が認められたのは、伝承遊び実施得点、指導法、普及法などであった。

I はじめに

幼児の身体発達の現状は決して楽観できる状況にはない。筆者ら(2002)は、幼児の運動能力が30年前に比べて低下傾向を示し、身体の不器用さが進行していることを明らかにした。その原因は、家庭においては幼児の外遊び時間が減少し、遊び友達が少なくなり、異年齢集団での遊びがすっかり影をひそめてしまったことにある。また、幼児の運動能力の発達には在園時間が環境要因として影響を与えていることを明らかにした(1986)。すなわち在園時間の長い子が短い子どもよりも運動能力が高かった。したがって、保育園や幼稚園での生活が非常に大切であることがわかる。その理由として、園には遊びの「3間」と言われる「遊び時間」、「異年齢集団の仲間」、遊びに適した「空間」があり、そこには「指導者」がいて「安全」が保障されている。現時点では、幼児にとって最も恵まれた環境である。良い環境における遊ぶ時間の長短が、身体の発達に影響が及ぶことは容易に推察できる。子どもたちが伸び伸びと遊びを展開するためには、保育者が子どもたちの気持を全面的に受け止めながら、良い環境の中で豊かな遊びを展開することである。したがって、保育者による遊びの教材研究は不可欠といっても過言ではない。伝承遊びの研究には柳田國男(1942)や半澤敏郎(1980)などの貴重な調査報告がある。しかし、幼児教育施設を対象とした全国調査はほとんど見当たらない。

本研究は保育教材となっている伝承遊びの実施状況とそれに関わる保育者の意識を把握するために日韓の伝承遊び研究会で調査を行ったものである。日本の調査は穂丸武臣、丹羽孝、勅使千鶴が担当した。

本報では日本の園種と設置形態による伝承遊びの実施状況と保育者の意識について、その検討結果を報告する。

II 研究の方法

1. 研究対象:本研究の調査対象園の選択に当たっては、『全国学校総覧 2004』と『全国社会福祉施設等名簿』の平成 16 年発行を用いて国立幼稚園は全園、公私立の幼稚園と保育所は各県庁所在地とそれ以外の市町村から多段階抽出法により、幼稚園は 568 園、保育所は 590 園、合計 1158 園を抽出した。全体の回収率は約 56% で、分析の対象はその他・園種不明を含めて 651 園であった。
2. 質問紙の配布と回収について:質問紙の配布と回収は共に郵送によって行った。記入に当たってはアンケートの性格上、年長組の担当の保育者またはそれに準ずる者に、園長先生を通して依頼した。
3. 調査時期:調査用紙の発送は 2004 年 11 月 10 日、回収締め切りは 2005 年 1 月 10 日であった。
4. アンケート質問項目の内容:アンケート調査の質問内容は保育者が実施している伝承遊びの状況と、保育者の意識や認識に関するもので構成された。伝承遊び種目は、文献より 61 種目を抽出した。
5. 伝承遊び調査記入方法について:伝承遊び実施状況の記入は、実施、承知、不承知の選択肢から該当するものをつけた。実施は、過去 3 年間に園で幼児と一緒に伝承遊びを実施したことがある。承知は、その伝承遊びの名前や遊び方法は知っているが過去 3 年間実施していない。不承知は、遊びの名前や内容を知らないし、実施したことがないである。
6. 分析の視点:分析は園種・設置形態別にクロス集計し、差の検定は χ^2 検定、有意水準を $p<0.05$ とした。

結果

1. フェースシート項目について

- 1) アンケート調査分析対象園の内訳は、国立幼稚園(以後 国幼とよぶ)は 39 園で全体の約 6.7%、公立幼稚園(以後 公幼とよぶ)は 132 園で全体の 22.8%、私立幼稚園(以後 私幼とよぶ)は 118 園で全体の 20.34%、公立保育園(以後 公保とよぶ)は 139 園で全体の約 24%、私立保育園(以後 私保とよぶ)は 142 園で全体の約 24.5%、その他(設置形態、園種不明)は 12 園で約 1.7%であった。

2) 園の地域環境について

国幼は住宅地域約 87%、商業地域約 5.1%、農村地域約 6%あった。公幼は住宅地域

64.4%、商業地域約 12.1%、農村地域約 18.9%、漁村地域約 1%であった。私幼は住宅地域約 70.3%、商業地域約 14.4%、農村地域約 10.2%、漁村地域約 1.7%、公保は住宅地域約 62.6%、商業地域約 10.8%、農村地域約 22.3%、漁村地域約 2.9%。私保は住宅地域約 66.2%、商業地域約 7%、農村地域約 19.7%、漁村地域約 3.5%であった。

回収された分析対象園の立地環境は、住宅地域が最も多く、次いで農村地域、商業地域、漁村地域の順であった。国幼は国立大学付属園で、多くの大学が都市部に立地しているために住宅地域の占める率が他の園種に比べて高かった。

3) 回答者の園種・設置形態別年齢構成について

アンケート回答者の年齢構成比率を高い順に示すと、国幼は、40代 > 30代 > 50代 > 20代の順であった。公幼は、40代 > 50代 > 30代 > 20代の順であった。私幼は、20代 > 30代 > 40代 > 50代の順であった。公保は、40代 > 50代 > 30代 > 20代の順であった。私保は、40代 > 20代 > 30代 > 50代の順であった。設置形態では公立の幼稚園、保育園の年齢構成が類似し、40歳代の占める率が最も高く、20代が最低であった。私幼は20代が30%を占めて最も多く、年齢が上がるに従って比率は低下した。回答者の年齢分布は園種・設置形態において差が認められた。

2. アンケート結果について

1) 園種・設置形態別の伝承遊び実施率および遊びの分類

園種・設置形態別の伝承遊び実施率の高い順と遊びの分類を表1と表2に示した。本調査で選択された伝承遊びは61項目で、表の最下欄に示している遊びの分類記号Gは集団的なゲーム遊び、分類記号Mは道具操作系の遊び、分類記号SGは歌を伴った遊び、分類記号Aはその他で、知的な遊び・自然環境にかかわる遊び・行事的な遊びであることを示している。伝承遊び実施率が80%以上の遊びの特徴は、分類記号Gと分類記号Mに属する運動遊びが高い頻度で実施されていた。国幼、公幼、私幼、公保、私保は同様の傾向であった。分類記号Gの運動遊びは「だるまさんが転んだ」「追いかけて鬼」「かくれんぼ」「ハンカチ落とし」「尻尾取り」などであった。分類記号Mの道具操作系の遊びは「こま回し」「縄跳び」「折り紙」「縄跳び」「まりつき」などであった。分類記号SGの歌を伴った遊びは「かごめかごめ」「花いちもんめ」「あぶくたつたにえたつた」であった。

また、伝承遊び61項目の内、園種・設置形態で実施率に差が認められた遊びは、国幼・公幼の方が他の園種より高かった項目は「子とろ子とろ」「猫とねずみ」「どんじゃんゲーム」「ちゃんばらごっこ」「ドロケイ」「こま回し」「たご揚げ」「羽根つき」「ピー玉」「まりつき」であった。公保の実施率が高かった項目は「靴とり」と「まりつき」であった。私保が高かった項目は「目かくし鬼」と「相撲ごっこ」であった。私幼が最も実施率が高かった項目は無かった。

表1 幼稚園における伝承遊び実施率の設置形態別比較

NO	国立幼稚園			公立幼稚園			私立幼稚園		
	遊び名	分類	実施率	遊び名	分類	実施率	遊び名	分類	実施率
1	だるまさんが転ん	G	100	カルタとり	A	100	折り紙	M	100
2	こま回し	M	100	こま回し	M	99	かくれんぼ	G	98
3	縄跳び	M	100	縄跳び	M	99	かごめかごめ	SG	98
4	2虫取り	A	100	2虫取り	A	99	だるまさんが転ん	G	98
5	あやとり	A	100	折り紙	M	99	カルタとり	A	98
6	折り紙	M	100	ままごと遊び	A	99	縄跳び	M	97
7	すごろく遊び	A	100	だるまさんが転ん	G	99	追いかけ鬼	G	96
8	ままごと遊び	A	100	あやとり	A	98	2虫取り	A	96
9	花いちもんめ	SG	100	かごめかごめ	SG	97	ままごと遊び	A	96
10	追いかけ鬼	G	97	すごろく遊び	A	96	花いちもんめ	SG	96
11	かくれんぼ	G	97	花いちもんめ	SG	96	あやとり	A	94
12	たこ揚げ	M	97	追いかけ鬼	G	95	お人形さんごっこ	A	91
13	お人形さんごっこ	A	97	あぶくたった	SG	95	あぶくたった	SG	90
14	カルタとり	A	97	かくれんぼ	G	95	尻尾とり	G	87
15	あぶくたった	SG	95	ハンカチ落とし	G	94	こま回し	M	87
16	かごめかごめ	SG	95	お人形さんごっこ	A	94	ハンカチ落とし	G	87
17	ハンカチ落とし	G	90	尻尾とり	G	91	まりつき	M	86
18	相撲ごっこ	G	90	たこ揚げ	M	90	すごろく遊び	A	85
19	まりつき	M	90	まりつき	M	86	おしくらまんじゅう	G	85
20	ちゃんばらごっこ	G	87	草ずもう	A	85	もちつき	A	82
21	尻尾とり	G	85	おしくらまんじゅう	G	82	草ずもう	A	79
22	お手玉	M	85	相撲ごっこ	G	81	相撲ごっこ	G	77
23	草ずもう	A	85	お手玉	M	77	お手玉	M	73
24	もちつき	A	85	渦巻きじゃんけん	G	76	缶ぼっくり	M	71
25	影踏み鬼	G	79	もちつき	A	76	たこ揚げ	M	71
26	おしくらまんじゅう	G	79	どんじゃんゲーム	G	75	渦巻きじゃんけん	G	70
27	剣玉	M	79	羽根つき	M	75	砂取り遊び	M	68
28	缶ぼっくり	M	77	剣玉	M	73	影踏み鬼	G	67
29	ゴム跳び	M	77	雪投げ合戦	G	73	風ぐるま	M	66
30	羽根つき	M	77	草笛あそび	A	69	雪投げ合戦	G	64
31	雪投げ合戦	G	69	影踏み鬼	G	68	草笛あそび	A	63
32	竹馬	M	69	ちゃんばらごっこ	G	66	ちゃんばらごっこ	G	63
33	どんじゃんゲーム	G	67	ドロケイ	G	65	ドロケイ	G	59
34	ドロケイ	G	67	砂取り遊び	M	65	どんじゃんゲーム	G	58
35	草笛あそび	A	67	缶ぼっくり	M	64	腕相撲	G	58
36	ビー玉	M	64	ゴム跳び	M	63	着せ替え人形	A	56
37	風ぐるま	M	64	着せ替え人形	A	62	とうりゃんせ	SG	54
38	渦巻きじゃんけん	G	62	竹馬	M	61	盆踊り	A	54
39	腕相撲	G	59	風ぐるま	M	61	ゴム跳び	M	53
40	着せ替え人形	A	59	とうりゃんせ	SG	61	剣玉	M	51
41	影絵遊び	A	56	盆踊り	A	59	竹馬	M	51
42	砂取り遊び	M	54	腕相撲	G	57	羽根つき	M	50
43	とうりゃんせ	SG	49	猫とねずみ	G	50	猫とねずみ	G	42
44	おはじき	M	46	影絵遊び	A	49	影絵遊び	A	41
45	お月見	A	44	ビー玉	M	48	おはじき	M	38
46	そり・スケート	M	38	そり・スケート	M	47	ビー玉	M	37
47	ケンケン相撲	G	36	おはじき	M	47	ケンケン相撲	G	34
48	盆踊り	A	36	子とろ子とろ	G	35	そり・スケート	M	32
49	メンコ	M	33	お月見	A	32	お月見	A	27
50	猫とねずみ	G	28	メンコ	M	28	メンコ	M	24
51	子とろ子とろ	G	23	ケンケン相撲	G	26	子とろ子とろ	G	21
52	缶蹴り	G	10	田んぼの田	G	18	ぞうり隠し・靴隠し	G	15
53	田んぼの田	G	10	靴取り	G	16	Sケン	G	11
54	石蹴り	M	10	ぞうり隠し・靴隠し	G	16	靴取り	G	10
55	ぞうり隠し・靴隠し	G	8	缶蹴り	G	14	缶蹴り	G	10
56	靴取り	G	5	Sケン	G	14	田んぼの田	G	10
57	目かくし鬼	G	5	目かくし鬼	G	12	石蹴り	M	8
58	Sケン	G	5	石蹴り	M	12	目かくし鬼	G	7
59	地面の陣取り	M	3	地面の陣取り	M	8	字かくし遊び	A	4
60	字かくし遊び	A	3	字かくし遊び	A	5	どこゆき(町内め)	G	3
61	どこゆき(町内め)	G	0	どこゆき(町内め)	G	2	地面の陣取り	M	2

分類記号 M:道具操作系 G:集団遊び系 SG:歌とゲーム A:その他

表2 保育園における伝承遊び実施率の設置形態別比較

No	公立保育園			私立保育園			全園種		
	遊び名	分類	実施率	遊び名	分類	実施率	遊び名	分類	実施率
1	ままごと遊び	A	100	縄跳び	M	100	折り紙	M	100
2	折り紙	M	99	折り紙	M	100	ままごと遊び	A	99
3	カルタとり	A	99	ままごと遊び	A	100	カルタとり	A	99
4	かごめかごめ	SG	99	かごめかごめ	SG	99	縄跳び	M	99
5	縄跳び	M	97	カルタとり	A	99	かごめかごめ	SG	98
6	あやとり	A	97	追いかけ鬼	G	98	だるまさんが転んだ	G	97
7	お人形さんごっこ	A	97	かくれんぼ	G	98	かくれんぼ	G	97
8	2虫取り	A	97	だるまさんが転んだ	G	96	あやとり	A	96
9	追いかけ鬼	G	96	お人形さんごっこ	A	96	追いかけ鬼	G	96
10	かくれんぼ	G	96	あやとり	A	96	2虫取り	A	96
11	あぶくたった	SG	96	花いちもんめ	SG	96	花いちもんめ	SG	95
12	こま回し	M	95	2虫取り	A	92	お人形さんごっこ	A	95
13	たこ揚げ	M	95	あぶくたった	SG	92	あぶくたった	SG	94
14	だるまさんが転んだ	G	94	ハンカチ落とし	G	91	こま回し	M	92
15	花いちもんめ	SG	94	まりつき	M	90	ハンカチ落とし	G	90
16	まりつき	M	92	もちつき	A	90	すごろく遊び	A	90
17	すごろく遊び	A	91	おしくらまんじゅう	G	88	まりつき	M	89
18	尻尾とり	G	87	尻尾とり	G	88	尻尾とり	G	88
19	ハンカチ落とし	G	87	すごろく遊び	A	86	たこ揚げ	M	86
20	相撲ごっこ	G	85	相撲ごっこ	G	86	おしくらまんじゅう	G	84
21	お手玉	M	80	こま回し	M	85	相撲ごっこ	G	83
22	おしくらまんじゅう	G	80	たこ揚げ	M	82	もちつき	A	80
23	渦巻きじゃんけん	G	78	お手玉	M	78	草ずもう	A	80
24	草ずもう	A	78	影踏み鬼	G	76	お手玉	M	77
25	羽根つき	M	73	草ずもう	A	76	渦巻きじゃんけん	G	74
26	雪投げ合戦	G	73	渦巻きじゃんけん	G	75	影踏み鬼	G	71
27	盆踊り	A	72	盆踊り	A	74	雪投げ合戦	G	71
28	草笛あそび	A	72	着せ替え人形	A	71	草笛あそび	A	67
29	もちつき	A	72	雪投げ合戦	G	70	缶ぼっくり	M	66
30	影踏み鬼	G	70	腕相撲	G	69	羽根つき	M	65
31	着せ替え人形	A	69	とうりゃんせ	SG	69	砂取り遊び	M	65
32	缶ぼっくり	M	65	砂取り遊び	M	66	着せ替え人形	A	65
33	ゴム跳び	M	64	缶ぼっくり	M	63	盆踊り	A	64
34	とうりゃんせ	SG	63	草笛あそび	A	63	ゴム跳び	M	62
35	砂取り遊び	M	63	ゴム跳び	M	61	とうりゃんせ	SG	61
36	風ぐるま	M	60	風ぐるま	M	58	どんじゃんゲーム	G	61
37	腕相撲	G	59	竹馬	M	56	風ぐるま	M	61
38	どんじゃんゲーム	G	59	ちゃんばらごっこ	G	56	剣玉	M	61
39	剣玉	M	59	羽根つき	M	56	腕相撲	G	61
40	猫とねずみ	G	49	剣玉	M	54	ちゃんばらごっこ	G	58
41	竹馬	M	48	どんじゃんゲーム	G	52	竹馬	M	55
42	お月見	A	45	ドロケイ	G	48	ドロケイ	G	52
43	ちゃんばらごっこ	G	43	おはじき	M	42	猫とねずみ	G	45
44	影絵遊び	A	41	猫とねずみ	G	42	影絵遊び	A	44
45	ドロケイ	G	39	影絵遊び	A	40	おはじき	M	41
46	おはじき	M	39	そり・スケート	M	39	ビー玉	M	40
47	そり・スケート	M	38	子とろ子とろ	G	35	そり・スケート	M	39
48	ビー玉	M	35	ビー玉	M	35	お月見	A	36
49	子とろ子とろ	G	31	お月見	A	34	子とろ子とろ	G	30
50	ケンケン相撲	G	28	ケンケン相撲	G	31	ケンケン相撲	G	30
51	ぞうり隠し・靴隠し	G	23	メンコ	M	26	メンコ	M	25
52	メンコ	M	22	缶蹴り	G	23	缶蹴り	G	17
53	缶蹴り	G	20	目かくし鬼	G	19	ぞうり隠し・靴隠し	G	16
54	田んぼの田	G	19	石蹴り	M	15	田んぼの田	G	15
55	靴取り	G	18	ぞうり隠し・靴隠し	G	14	靴取り	G	14
56	目かくし鬼	G	13	田んぼの田	G	14	目かくし鬼	G	13
57	石蹴り	M	13	靴取り	G	12	石蹴り	M	12
58	Sケン	G	11	Sケン	G	11	Sケン	G	11
59	字かくし遊び	A	8	地面の陣取り	M	6	地面の陣取り	M	5
60	地面の陣取り	M	6	字かくし遊び	A	3	字かくし遊び	A	5
61	どこゆき(町内め)	G	6	どこゆき(町内め)	G	2	どこゆき(町内め)	G	3

分類 M: 道具操作系 G: 集団遊び系 SG: 歌とゲーム A: その他
記号

3) 園種・設置形態別の伝承遊び実施得点について

伝承遊びの実施得点の算出は、実施（園で実施したことがある）を3点、承知（伝承遊びの名前と遊び方は知っている）を2点、不承知（伝承遊びの名前・方法も知らない）を1点として求めた。例えば、回答した園が伝承遊び全種目を実施した場合は183点となる。分析対象園の平均得点は154点であった。実施得点の+0.5標準偏差、160点以上を伝承遊び上位群とし、園種・設置形態別に上位群の割合を求めた。その結果、実施得点は国幼と公幼において約38%で最も高く、次いで公保の約30%、私保の約29%であり、私幼が最も低く約23%であった。設置形態別では公立幼稚園が私立幼稚園よりも実施得点が高い傾向を示した。また、国幼、公幼と比較して公保、私保の実施得点が低かった。公保と私保間には差が認められなかった。

3. 保育者の伝承遊びに関する意識

1) 保育における伝承遊び実施状況

伝承遊びを園で実施しているか否かについての質問であった。「実施している」「実施していない」の択一で回答を求めた。「実施している」と回答した比率は国幼、公幼、公保では100%であった。「実施していない」は、私幼で4園、私保で1園のみで、全体の1%であった。したがって、全国の99%の幼稚園や保育所で伝承遊びが実践されていた。

2) 伝承遊びの保育計画の実施主体（園種の括弧内の数字は%を示す）

伝承遊びを実施する際の主体についての質問であった。選択肢は「園の教育・保育方針」、「個人的な考えから」、「行政・官庁の指導」であった。「園の方針による」は、私幼（66）> 国幼（64）> 公幼（57）> 私保（52）> 公保（34）であった。「個人的な考えから」は、公保（52）> 私保（35）> 公幼（34）> 私幼（26）> 国幼（15）であった。

園種の比較では幼稚園が保育園よりも「園の教育方針」で伝承遊びを保育計画に導入する比率が高い傾向を示した。

3) 伝承遊びに対する保育者の関心度（園種の括弧内の数字は%を示す）

保育者の伝承遊びに対する関心度についての質問であった。「とても関心がある」「やや関心がある」「あまり関心がない」「まったく関心がない」の4つの選択肢から回答を求めた。「とても関心がある」は、公保（69）> 公幼（66）> 私保（65）> 国幼（60）> 私幼（52）であった。公保の関心度が最も高く、私幼が最も低かった。

しかし、「やや関心がある」を加えると園種・設置形態に関わらず、すべての園種で伝承遊びに関心を持っていた。

4) 伝承遊びをカリキュラムに組み込む必要性について（園種の括弧内の数字は%を示す）

伝承遊びを保育カリキュラムに組み込む必要性についての質問であった。回答の4つの

選択肢は「必要」「やや必要」「やや必要でない」「必要でない」であった。「必要」は、国幼(82) > 公保(81) > 私保(80) > 公幼(75) > 私幼(74)であった。「やや必要」は、私幼(25) = 公幼(25) = 私保(25) > 公保(19) > 国幼(18)であった。「必要ない」は私幼の1%だけであった。

5) 伝承遊びを保育カリキュラムに取り入れる理由(複数回答:園種の括弧内の数字は%を示す)

伝承遊びを保育カリキュラムに取り入れる理由についての質問であった。回答の選択肢は「幼児の成長や発達に有効であるから」「日本固有文化の伝承」「カリキュラムの内容を豊かにするため」「自国の文化に対するアイデンティティの確立のため」「国際化に役立つから」であった。「幼児の発達に有効」は、国幼(87) > 公幼(86) > 私保(84) > 公保(83) > 私幼(82)であった。「日本固有の文化の継承」は、私保(82) > 公幼(79) > 公保(78) > 私幼(77) > 国幼(64)であった。「カリキュラムを豊かにする」は、公幼(34) > 国幼(33) > 私幼(28) > 公保(24) > 私保(21)であった。「アイデンティティを確立するため」は、国幼(28) > 公幼(22) > 公保(17) = 私保(17) > 私幼(16)であった。「国際化に役立つから」は全体で4%以下であったので省略した。

回答率の高かった「幼児の成長や発達に有効であるから」「日本固有文化の伝承」の2項目は、園種による差は認められなかった。回答率が下位の「カリキュラムを豊かにする」「アイデンティティを確立するため」の2項目については園種・設置形態間に差が認められた。

6) 伝承遊びの実施時期について(園種の括弧内の数字は%を示す)

伝承遊びを実施する時期についての質問である。選択肢の「日常的に実施する」「生活主題の中で」「行事があるときに実施する」「定期的に」「特定の時に」から回答を求めた。「日常的に実施する」は、公幼(95) = 公保(95) > 私保(93) > 私幼(91) > 国幼(76)であった。「定期的に」は、国幼(5) > 私幼(4) = 私保(4) > 公保(3) = 公幼(3)であった。他の選択肢の回答は非常に少なかったので省略した。全ての園種で伝承遊びが日常的に実施されるように配慮されていた。園種・設置形態に差はなかった。

7) 伝承遊びの指導法について(園種の括弧内の数字は%を示す)

伝承遊びの指導法についての質問に対する回答の選択肢は、伝承遊びの「内容と方法を教える」「内容と方法を教えて創造的に遊べるようにする」「道具を提供し自由に遊べるようにする」であった。「内容と方法を教える」は、公保(37) > 私幼(34) > 私保(32) > 公幼(26) > 国幼(8)であった。「内容と方法を教えて創造的に・・」は、国幼(54) > 私保(53) > 公幼(49) > 公保(45) > 私幼(40)であった。「道具を提供し自由に遊べる

ようにする」は、国幼(22) > 私幼(17) = 公幼(17) > 公保(13) > 私保(10)であった。指導法には園種・設置形態による差が認められた。

8) 伝承遊びを計画するときの参考資料(複数回答・園種の括弧内の数字は%を示す)

伝承遊びを計画する際にどのような参考資料を使っているかの質問に対する回答の選択肢は、「伝承遊び関連の専門書」「研修会などの資料」「雑誌・新聞・テレビなど」「養成校時代の教科書など」「幼稚園教育要領又は保育所保育指針を参考」「インターネット」であった。「伝承遊び関連の専門書」は、公幼(68) > 公保(67) > 私保(61) > 私幼(54) > 国幼(49)であった。「雑誌・新聞・テレビなど」は、国幼(56) > 公保(54) > 公幼(52) > 私幼(51) > 私保(46)の順であった。「研修会などの資料」は、公保(53) > 公幼(52) > 私保(49) > 私幼(44) > 国幼(21)の順であった。「教育要領や保育指針を参考」は、公幼(27) > 国幼(21) > 公保(15) > 私保(13) > 私幼(10)の順であった。「養成校時代の教科書など」は、私保(24) > 私幼(17) = 公幼(17) > 公保(16) > 国幼(5)の順であった。「インターネット」の使用は全園種において5%未満でほとんど活用されていなかった。

「伝承遊び関連の専門書」「教育要領や保育指針を参考」「養成校時代の教科書など」の活用法については園種による差が認められた。

9) 保育者の伝承遊び習得方法(複数回答・園種の括弧内の数字は%を示す)

保育者の伝承遊び習得方法に関する質問に対する回答の選択肢は、「幼い時の体験」「研修会に参加して」「書籍や雑誌から」「テレビやマスメディアを通じて」「先輩や同僚から学んだ」「養成校で学んだ」などから複数回答を求めた。「幼い時の体験」は、全ての園種・設置形態で90%以上の回答であった。「先輩や同僚から学んだ」は、公保(65) > 国幼(64) > 公幼(63) > 私幼(53) > 私保(48)の順であった。

「書籍や雑誌から」は公保(45) = 公幼(45) > 国幼(41) > 私保(38) > 私幼(37)の順であった。「研修会に参加して」は、公保(45) > 公幼(42) > 私保(38) > 私幼(29) > 国幼(13)の順であった。「養成校で学んだ」は、私保(21) > 私幼(20) > 公幼(14) > 公保(13) > 国幼(3)の順であった。「先輩や同僚から学んだ」「書籍や雑誌から」の2項目は公立の園が私立の園よりも高い回答率で差が認められた。逆に「養成校で学んだ」は私立園の方が公立園より高い比率を示し、差が認められた。

10) 伝承遊びを保育計画に組み込む際の課題(複数回答:園種の括弧内の数字は%を示す)

伝承遊びをカリキュラムで実施する際に感じている難しさに関する質問であった。「伝承遊びに対する保育者自身の知識不足」は、私保(63) > 公幼(59) > 私幼(56) > 公保(54) = 国幼(54)であった。「伝承遊びの指導が困難」は、私保(30) > 公保(29) > 公

幼(21) > 私幼(18) > 国幼(3)の順であった。「道具の購入が困難」は、公保(16) > 公幼(14) > 私幼(10) > 私保(7) > 国保(5)であった。「子どもの数が多すぎる」は、公保(17) > 私保(14) > 私幼(12) > 公幼(11) > 国幼(5)であった。「時間不足」は、私幼(14) > 公幼(11) > 私保(9) > 公保(6) > 国幼(0)であった。「伝承遊びの指導が困難」「道具の購入が困難」に関する項目は公幼、公保が私幼、私保より高い比率を示し、差が認められた。「子どもの数が多すぎる」は公保、私保で国幼、公幼、私幼より比率が高く、差が認められた。

11) 伝承遊び普及への課題(複数回答:園種の括弧内の数字は%を示す)

伝承遊びを普及させるために必要な条件についての回答を求めた。「保育者の研修会の機会を増やす」は、公保(68) > 公幼(62) > 私保(55) > 私幼(46) = 国保(46)であった。「家庭との連携」は、国幼(46) > 公幼(45) > 私保(39) > 私幼(33) > 公保(31)であった。「養成校で学生の育成」は、私幼(44) > 公保(35) > 私保(32) > 公幼(23) > 国幼(15)であった。「関連の資料の開発」は、公幼(35) > 国幼(33) > 私幼(30) > 私保(29) > 公保(27)であった。伝承遊びの普及に必要な課題に対する各回答項目は、園種・設置形態による差が認められた。

V 考察

1. 伝承遊びの実施状況について

まず、伝承遊びの共通認識のためにその定義について述べる。伝承遊びについて中地万里子(1980)は「子どもの遊び集団の中で自然発生的に生まれ、代々共有されてきた遊びであり、子ども社会の縦横のつながりによって、また、大人から子どもへの経路を通して伝えられ、受け継がれてきた遊びの総称である。」と定義している。そして、小川博久(2000)は中地の定義を一般的に認められると述べている。筆者らは、これらの定義を基本にして遊び項目の選択は半澤(2000)増田編(1989)、穂丸編(2003)、芸術教育研究所(1986)、大林(1998)、奥・ながた(1987)、石原・穂丸ら(1989)、韓丘庸(2000)、小川清実(2001)、などの文献から保育教材として有用と思われる伝承遊び種目を抽出した。

遊びの分類には社会学的な視点からJ.ホイジンガ(1963)やR.カイヨワ(1970)などのような方法もあるが、本論では子どもの身体情報処理能力の視点から分類した。

全国の園で遊ばれていると判断する基準値を実施率80%以上とした。実施率80%以上の伝承遊びの分類では、分類記号Gと分類記号Mに属する運動遊びが最多であった。その次に分類記号A、分類記号SGの順に多かった。その傾向は全園種で同じ傾向を示した。

各分類番号の内容は、分類記号G(集団によるゲーム系の遊び)は「だるまさんがころん

だ」「かくれんぼ」「追いかけ鬼」「ハンカチ落とし」「尻尾取り」であった。分類記号 M(道具操作系の遊び)は「あやとり」「折り紙」「縄跳び」「まりつき」「こま回し」であった。分類記号 A(知的、自然との関わりの遊び)では「カルタとり」「すごろく」「お人形さんごっこ」「虫取り」であった。分類記号 SG系(歌を伴った遊び)は「かごめかごめ」「花いちもんめ」「あぶくたつたにえたつた」であった。これらの実施率 80%以上の遊びは、保育者が保育・教育計画の段階で多様な発達の側面を考慮しながら、伝承遊びを分類しカリキュラムに組み込んでいるためであると解釈された。そのことは、保育者が伝承遊びの目的として、子どもの成長や発達に有効とするものが約 80%を超えていることから、子どもの身体活動量の多い運動遊びや道具の操作系のいわゆる目と手、目と脚の協応能もしくは神経系の発達を期待していることが読み取れた。さらに歌を伴った遊びや知的な遊び、自然環境の中での遊びは、日本の子ども文化の継承という視点から組み込まれていると推察された。

さらに、幼稚園教育要領や保育所保育指針に示されている「健康」「人間関係」「表現」「環境」「ことば」を考慮しながら保育計画に導入されていると思われた。

一方、筆者らが路地裏や野原で親しんで遊んだ 1950 年代のダイナミックな「Sケン」や、「靴取り」「石蹴り」「町内めぐり」「缶けり」などの遊びは、園種・設置形態共通で実施率が 15%以下であり、このままでは消滅する危険性があると危惧された。

これらの実施率の低くなった遊びは、子どもの身体発達を促すために必要な運動量や質的な面で、さらに、子どもの社会化を育てる人との関わりの視点からも優れた遊びであり、消滅させてはならない責任があると思われた。

また、伝承遊び実施得点を園種・設置形態別に比較した結果、設置形態による幼稚園比較では国幼と公幼の実施得点が私幼よりも高かった。この差に影響を与えているのは回答者の年齢の要素が考えられた。すなわち、国幼の 40 代以上は約 59%、公幼は 65%、私幼が 42%、20 代は国幼が約 5%、公幼が 13%、私幼が 31%であることから、若年保育者の多い私幼の実施率が低くなっていると考えられた。したがって、保育者の年齢を考慮した保育教材研究や研修会の配慮が重要である。

2. 伝承遊びに関する保育者の意識などについて

保育計画立案に際して伝承遊び導入を判断する主体は、園の方針で行っているとの回答率は、私幼が約 66%で最も高く、次いで国幼、公幼の順で高かった。個人的な考えで保育計画に組み込んでいるのは公保の 33%が最も高かった。この結果から幼稚園は園長を中心として園全体で教育計画を立案しているのに対し、保育園では保育計画の立案が保育者の意志にゆだねられる部分が多いことや遊びの計画立案においては、保育者個人の自由裁量が幼稚園よりも高いことが反映していることが推察された。

幼稚園や保育所で伝承遊びの実施率が非常に高いことから、保育者の伝承遊びに対する関心が高いことは当然であり、調査結果では、「とても関心がある」「少し関心がある」を含め

ると99%の保育者が伝承遊びに関心を持っていた。

保育者が何のために伝承遊びを保育へ導入するのか、この質問項目は、伝承遊びを保育教材として導入する目的を問うものであった。「子どもの発達に有効であるから」が約84%、「日本の遊び文化の伝承」が約78%であり、この2項目が主要な目的であり園種・設置形態による差はなかった。

園種・設置形態による差が認められたのは「伝承遊びで保育を豊かにする」と「アイデンティティの確立のため」の2項目で、国幼、公幼、私幼、公保、私保の順に比率が高かった。これは園によって伝承遊びの考え方やとらえ方による差であると思われた。

伝承遊びは全園種・設置形態で日常的に行われている。しかし伝承遊びの指導法に関しては、園種によって違いが認められた。すなわち伝承遊びの基本を教えて、それを幼児が創造的に遊ぶようにしていると回答した比率は国幼が最も高く、子どもたちの自由な活動を目指していることが読み取れた。

伝承遊びが自由に展開されるようにという考え方は、幼稚園が保育園より高い比率を示していた。

伝承遊びの指導法については、保育者が遊びの基本的な内容や簡単なルールを指導しなければ、自然発生的に遊びは伝承されるものでないし、広がっていかない。幼児が遊び体験を十分に積み、保育者がその場になくても友達同士の教え合いや協力によって遊びの質が向上していくような指導が重要であると思われた。

3. 伝承遊びの普及に関する今後の課題

保育者は伝承遊びを保育に導入する際の困難な理由については、最も大きな課題として、保育者が伝承遊びに対する知識が不足していると思っている者が全体では約58%で、過半数を超えていた。その比率は私保が最も高かった。それと関連して伝承遊びの指導が難しいと思っている比率も私保が最も高かった。これは私保の回答者は20代の比率が他の園種に比べて高いことが影響していると考えられた。

保育者が伝承遊びを習得した経緯は、園種・設置形態共通で、幼児期あるいは子どものころの体験によるものが最も多かった。園種・設置形態において差が認められたのは同僚から伝授する比率で、公保、国幼、公幼が私幼、私保よりも有意に高かった。これは職場での保育教材研究のあり方や情報交換などに何らかの違いがあると推察された。

伝承遊びを普及するためにどうするべきかの問に対して、保育者の研修の機会を増やすとの回答が多かった。その比率は公保、公幼が国幼、他の園種よりも多かった。伝承遊びを子ども時代に体験したとしても、いざ保育実践をする際にはルールがわからないとか、すでに記憶が薄れているとか、指導の自信が持てないなどの意見を聞くことがある。職場研修などで遊びを再確認することも大切な課題である。また、国幼、公幼の保育者は家庭と連携し保護者と園との交流を推進する必要性を感じているようであった。それは、伝承遊びが子ども

の日常的な生活圏内でガキ大将を中心とした近所遊びから始まったものであるから、その原点を大切にしたいという願いが込められていると解釈された。

また、私幼の回答者は、養成校で保育者を目指す学生に対して、授業で伝承遊びを指導する必要性を指摘していた。これらのことから、養成校における幼児体育の指導プログラムに伝承遊びを位置づける必要性がとらわれた。筆者ら（2007）の調査によれば、保育者を目指す学生を対象とした伝承遊び経験は現職の保育者より低い傾向を示した。将来的にも遊び体験不足の保育者が増加することが予測されるので、養成校の授業内容や職場研修のプログラムなどに一層の配慮が必要である。

最後に、伝承遊びの教育的意義について述べておきたい。世代から世代へ縦に受け継がれていく伝承遊びは、不要なものを歴史と時間のフィルターで淘汰しながら、子どもにとって楽しく、面白いエキスだけを子どもから子どもへと伝える。そのような伝承遊びの体験は、子どもの心身の発達に欠かせない栄養素の役割を果たしている、といっても過言ではない。子ども達が楽しさや面白さを体験することによって行動意欲が育ち、遊びが豊かになるにつれて楽しさも低次から高次なものへ高まっていく。これが子どもの知的な好奇心を刺激し、創造的な活動を生み出すエネルギーとなる。

伝承遊びは一人よりも群れて遊ぶことがより楽しく意味を持つものである。伝承遊びは年齢や発達に応じてルールの変更が柔軟に行なわれ、異年齢集団で遊ぶことができる。そのため、リーダー（ガキ大将）が必要であり、そのリーダーは遊びの中で育てられる。また、伝承遊びには一定のスキルや体力が要求され、遊びを教えたり、教えられたり、切磋琢磨することによって、子ども同士のコミュニケーション能力を育てると同時に子ども相互の理解を深め、子どもの社会化を促すことができる。したがって、伝承遊びは「竹馬の友」を育てる重要な機能を持っているのである。

さらに、伝承遊びは身体情報処理の観点から身体操作的遊び、道具の操作の遊び、集団での遊びに分類することができる。「丸太渡り」などの遊びは、自己の身体操作性として大切な筋感覚、平衡感覚、空間感覚などの身体内部の情報処理能力を発達させる。「こま」や「竹馬」などは、動具の操作性機能の特徴である目と手・脚の協応能を発達させる。「鬼ごっこ」などは集団的なゲームによる攻防の対応関係など外部情報処理能力の発達を促す。まさに、伝承遊びは子どもの知恵としなやかな身体を育てる「宝物」である。

子どもの遊びを豊かにするには、多くの遊び手段を子どもに伝える必要がある。1950年代の遊びは、身近な年上の遊びを見よう見真似で学習し、遊び手段を習得し、それを使って遊びを発展させたものである。現在では、この「ガキ大将の役割」を保育者が担わなければならない時代であり、遊び伝承者として保育者の役割は大きいといえよう。

今後の課題として保育者の伝承遊びに関する知識や指導方法の充実を図ることと併せて、伝承遊びの教材的価値や指導の系統性など総合的な研究を深めていく必要がある。

V まとめ

結果と考察は以下のようにまとめられる。

1. 調査回答者の年齢構成は、私立幼稚園と私立保育園保育者の20代の比率が高く設置形態間に有意な差が認められた。
2. 伝承遊びは、園種・設置形態にかかわらず調査対象の全ての幼稚園や保育所で保育・教育教材として導入されていて、保育者の伝承遊びに対する関心は非常に高かった。実施得点では国公立幼稚園が最も高く私立幼稚園が低かった。その理由は回答者の年齢構成による差であることが推察された。
3. 伝承遊びを保育で実施する目的は、子どもの成長と発達に有効であること。日本の遊び文化を継承すること。の比率に、園種の差はなかった。
4. 伝承遊びを指導する際の課題は、園種・設置形態に関わり無く保育者自身の伝承遊びに対する知識不足があげられた。その対策として、保育者の研修の充実、家庭との連携、養成校での指導などがあげられた。

謝辞：本研究にあたり、アンケート調査にご協力いただいた全国の幼稚園・保育所の方々に感謝いたします。なお、この全国調査は韓国・梨花女子大学校幼児教育学科 李基淑氏、厳正愛、? 園大学校 児童学科 鄭美羅と共同研究で行われ、調査に必要な研究費は韓国からの支援によって行われたものであることを付記し深謝いたします。

参考文献

- 穠丸武臣・三井淳蔵・植屋晴見他（1986）：『幼児の遊び環境と運動能力の関連』教育医学 31（4）6-11.
- 穠丸武臣編著（2003）：『幼児の心身を育てる遊び』圭文社，東京．
- 穠丸武臣・野中壽子他（2001）：『愛知県における幼児の体格・運動能力の年代変化』名古屋市立大学人文社会学部研究紀要第 11 号 127-145．
- 穠丸武臣（2007）：『幼児体育指導者の資格創成-保育者養成の立場から-』子どもと発育発達 5（1）21-24 杏林書院，東京．
- 芸術教育研究所（1986）：『伝承遊び辞典』黎明書房，名古屋．
- 半澤敏郎（1980）：『童遊文化史 第 1 巻』東京書籍，東京．
- 石原花子・穠丸武臣他（1989）：『保育内容に関する総合的研究』名古屋市立保育短期大学研究所研究紀要第 26 巻．
- J. ホイジンガ（1963）：『ホモルーデンス』高橋英夫訳 中央公論社．東京．
- 韓 丘庸（2000）：『朝鮮の子ども遊び博物館』東方出版．
- 中地万里子（1980）：『伝承遊び』平山宗宏編 現代子ども大百科，中央法規，1988，p568.
- 日本レクリエーション協会監修（1989）：『遊びの大辞典（実技編）』増田靖弘編 東京書籍株式会社，東京．
- 日本レクリエーション協会監修（1989）：『遊びの大辞典』増田靖弘編 東京書籍株式会社，東京．
- 小川清実（2001）：『子どもに伝えたい伝承あそび一起源・魅力とその遊び方』萌文書林，東京．
- 小川博久（2000）：『伝承遊びとは何か』無藤 隆編著，新・児童心理学講座 遊びと生活，金子書

穉丸 武臣

房，東京．

奥成達・ながたはるみ（1987）：『遊び図鑑』福音館書店，東京．

大林太良（1998）：『民族遊戯大辞典』大修館書店，東京．

R. カイヨウ（1970）：『遊びと人間』清水幾太郎・霧生和夫訳 岩波書店，東京．

柳田國男（1942）：『こども風土記』朝日新聞社，大阪．